

近代のボストン美術館に見る日中米文化交流について

—岡倉天心、長尾雨山そして呉昌碩の貢献—

The study on the cultural exchange between Japan, China, and the US in Museum of Fine Arts, Boston
—The contributions of Okakura Tenshin, Nagao Uzan and Wu Changshuo—

松村 茂樹¹

¹大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科

Shigeki Matsumura¹

¹ Department of Communication and Culture, Faculty of Language and Literature, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：ボストン美術館，文化交流，岡倉天心，長尾雨山，呉昌碩

Key words : Museum of Fine Arts, Boston, Cultural exchange, Okakura Tenshin,
Nagao Uzan, Wu Changshuo

抄録

ボストン美術館東洋美術展示場に掛けられている呉昌碩「与古為徒」扁額は、同美術館中国・日本美術部長であった岡倉天心が呉昌碩に依頼したものと考えられて来たが、実は、天心の友人で、当時上海在住の漢学者・長尾雨山が、隣人関係にあった呉昌碩に揮毫を依頼し、黒漆木額に仕立ててボストンの天心宛に送ったものである。この頃、雨山は、天心より、ボストン美術館鑑査委員を委嘱されており、その就任記念に、この扁額を贈ったと筆者は考えている。天心のボストン美術館における活動は高く評価されているが、その背景に呉昌碩と交流した雨山という中国の正統的学問を受け継ぐ学者の協力があつたことは、これまでほとんど指摘されていない。本稿は、これを分析し、近代において画期的成果を収めた日・中・米文化交流の意義を明らかにすることを目的とする。

1. はじめに

世界有数の美術館である米国のボストン美術館は、東洋美術の殿堂とも称せられる。その東洋美術コレクションが、一九〇四年から亡くなる一九一三年まで在籍（一九一〇年からは中国日本美術部長）した岡倉天心（一八六二—一九一三）^[1]によって整備され、充実の度を加えたことは有名である^[2]。

ボストン美術館の東洋美術展示場には、中国最後の文人と称される呉昌碩（一八四四—一九二七）^[3]が一九一二年に揮毫した「与古為徒」扁額が掲げられている。これは、従来、天心が呉昌碩に依頼したものと考えられて来たが、実は、天心の友人で、当時上海在住の漢学者・長尾雨山（一八六四—一九四二）^[4]が、隣人関係にあった呉昌碩に揮毫を依頼し、黒漆木額に仕立ててボストンの天心宛に送ったものである。この頃、雨山は、天心より、ボストン美術館鑑査委員を委嘱されており、

その就任記念に、この扁額を贈ったと筆者は考えている。

本稿では、この「与古為徒」扁額がボストン美術館に贈られた経緯を考証し、これに関わつた岡倉天心、長尾雨山そして呉昌碩の貢献を明らかにしたい。このことにより、近代のボストン美術館に見る日中米文化交流の存在に照明をあてることができよう。

2. 呉昌碩「与古為徒」扁額



呉昌碩「与古為徒」扁額は、一九一二年に揮毫されている。まずは題字と款書を見よう。

与古為徒

波士敦府博物館蔵吾国古銅器及名書画甚多、鉅觀也。好古之心，中外一致。由此以推，仁義道德，亦豈有異哉。故摘此四字題之。安吉吳昌碩，時壬子秋杪，客扈上。

〔古（いにしえ）と徒（ともがら）為り

ボストン府博物館蔵のわが国の古銅器及び名書画は甚だ多く、壯觀である。好古の心は、中国も外国も一致しているようだ。ここから推し測るに、仁義道德もまた、どうして異なることがあるのか。故にこの四字を選んでこれに題した。安吉の吳昌碩，時に壬子（一九一二年）秋杪（旧曆九月），扈上（上海）に客寓している。〕

この語句の出典は、『莊子』『人間世編』の「成而上比者，与古為徒」で，孔子とその弟子の顔回の問答の中で，顔回が，处世の方法として，君主に自分の意見を言う場合，古にかこつけるようにすれば，直言しても憂いはなくなり，これを「古と仲間になる」と表現した一節に見える。古を尊重し，古に返ることで理想の世を実現しようとする古文学派経学の学者でもあった吳昌碩が，中国の古の文物を多く所蔵するボストン美術館に贈る語句として，何とも妙を得たものと言えよう。

しかしながら，これは，吳昌碩自身の選句ではなかったようだ。吳昌碩が友人の沈石友（一八五八—一九一七）に宛てた葉書一枚（『吳昌碩信片冊』，二玄社，一九八二年）に，以下のようにある。

係美国人開博物院，属書四字扁，扁後祈作跋語云々。扁字用精華玄耀四字如何。望并跋示我，為叩。

〔米国人が博物院を開くに係り，四字扁額を属していますので，扁の後に跋語云々をお作り下さいますようお願い致します。扁字に「精華玄耀」四字を用いるのは如何でしょう。跋と併せて私にお示し下さいますよう，伏してお願い申し上げます。〕

つまり，吳昌碩は，当初「精華玄耀」四字を考えていたようなのである。ちなみに，この葉書には「缶（吳昌碩の号）自滬（上海）寄，十六日」とあるのみで，年月が記されておらず，消印の年月日も判読不能である。ただし「大清郵政明信片」の切手部分に「中華民國」朱色スタンプが押された葉書が用いられており，中華民國成立（一九一二年）直後に書かれた可能性が高いと思われる。

ただ，饒宗頤（林宏作訳）「缶翁の沈石友に与えた信片冊に跋す／ボストン博物館のために書した

吳昌碩の篆額」（『吳昌碩信片冊 別冊』，二玄社，一九八二年）は，

缶翁はアメリカの博物館のために書額したが，このことは一博物館にとどまらなかった。沈石友に与えた信片に「扁の字に『精華玄耀』という四字を用いる」といっているのは，恐らく他のもう一つの博物館を指すものである。と述べ，これはボストン美術館のためのものではないとしている。

だが，その後，吳昌碩自身がこのことについて言及している沈石友宛書簡（栗原蘆水編集発行『吳昌碩尺牘集』，二〇〇七年）が出て来た。

頃有美国波士敦府博物館設有中国三代鼎彝名画及工巧之物，為鉅觀。該館索弟書扁懸之。祈代擬四字并後跋数語（精華玄耀四字如何），叩頭叩頭。

〔近頃米国のボストン府博物館は中国三代の鼎彝・名画及び工芸品を並べており，壯觀を為しております。該館は私に扁額を書くことを求めてそこに懸けようとしています。代って四字并に後跋数語を擬することをお願い致します（「精華玄耀」四字は如何でしょう），伏し伏してお願い申し上げます。〕

この書簡にも日付は記されていないが，「上海九華堂製」の便箋を使っていることから，上海で書かれたと思われ，書風も前出『吳昌碩信片冊』所収の葉書とはほぼ同じなので，同時期のものであろう。吳昌碩は，沈石友に詩文の代作を多く依頼しており，緊要なものは重ねて伝えていたようである。ここには，ボストン府博物館つまりボストン美術館に贈る扁額であることが記されており，やはり吳昌碩は，「精華玄耀」四字を想定していたことがわかる。おそらくは，沈石友が「与古為徒」を提案し，吳昌碩もそれに従ったのであろう。

「精華玄耀」の出典は、『楚辞』『劉向，九嘆，惜賢』の「揚精華以炫耀兮」で，屈原「離騷」を追念して「精華を輝かしくあらわす」と述べた一節である。吳昌碩は，当初この語句が，中国文物の精華を多く展示するボストン美術館に贈るにふさわしいと考えたようだ。ただ，これは相手側を表現する語句としては素晴らしいが，吳昌碩の真骨頂とも言うべき自らの胸中にかこつける部分がない。その点，「与古為徒」なら，前述のように古文学派経学の学者としての矜持を示しつつ，相手側を称える表現となっており，吳昌碩がこれに従ったのも頷ける。沈石友は，吳昌碩本人以上に吳昌

碩を理解していたと言えるかもしれない。

3. 扁額贈呈の経緯

さて、この扁額がボストン美術館にもたらされた経緯について、ボストン美術館アジア・アフリカ美術部長をつとめた呉同は、「「與古為徒」—古美術とともに：岡倉覚三と中国」(名古屋ボストン美術館編集・発行『岡倉天心とボストン美術館 図録』一九九九年)の中で、

この傑作「與古為徒(遑)」は、呉昌碩(1842—1927)による欧米の美術館の為に制作された唯一の書で、岡倉覚三とこの上海の巨匠との友情によってもたらされた作品である。

と述べ、さらに、同扁額の解説で、

本作品は1912年の夏に中国を訪れた岡倉が制作依頼し、翌年ボストン美術館に寄贈された。実際に岡倉が上海で呉昌碩に会ったのか、また、この作品の彫版、象嵌、塗漆が上海で行われたのか、東京であったのかはいまだに不明である。彼は日本の著名な文人画家であった富岡鉄斎

(1836—1924)、清代末期に上海に住んでいた長尾楨太郎など共通の友人を通じて呉昌碩と交友を深めていた。

と記して、当時ボストン美術館中国日本美術部長であった岡倉天心(名は覚三)が、呉昌碩に依頼したものであるとしている。だが、実はこの扁額は、天心の友人で、当時上海在住の漢学者・長尾雨山(名は楨太郎)が、隣人関係にあった^[5]呉昌碩に揮毫を依頼し、黒漆木額に仕立ててボストンの天心宛に送ったものであった。

当時、天心が雨山に与えた書簡を、『岡倉天心全集』第七卷(平凡社、一九八一年、以下、天心の雨山宛書簡は全て同様)によって見るができるが、一九一三年三月十八日付書簡に、

先便申上候通額面ハ当館宛運賃先払にて御送附被下度

とあり、この扁額がボストンに送られようとしていることがわかる(この時、天心はボストンにいた)。また、一九一三年七月十五日付書簡に、

陳レハ呉昌碩額面出来御送附被下候趣ニて荷積証御廻致被下正ニ領収早速先方へ送附仕候御手数万謝之至ニ御座候 右文字「与古為徒」の語は何レの典故有之候哉 御示教被下度 呉昌碩之小伝併せて御示し被下候ハ、先方へ申通し度候 御序の節にて宜敷候

とあり、扁額がすでにボストンに送られ、荷積証

が天心の元にも送られて来たことがわかる(当時、天心は持病の腎臓炎が再発し、常陸五浦で静養していた)。天心は、雨山に「与古為徒」の出典を尋ね、呉昌碩の小伝を求めていることから、呉昌碩をよくは知らなかったようで、この扁額を天心が呉昌碩に依頼したとは思えない。また、天心の仕事は、ボストン美術館に収蔵すべき歴代の美術品を収集することであり、同時代人への作品依頼を雨山にしたとも思えない。さすれば、この扁額は、天心ではなく、雨山の主動でボストン美術館に贈られたと考えた方がいいのではないか。

では、雨山はどうしてこの扁額を贈ったのであろうか。実は、この頃、雨山は、ボストン美術館に関わることになっていた。天心より、ボストン美術館鑑査委員を委嘱されていたのである。

一九一二年十一月二十一日付書簡に、

陳レハ兼而得貴意候ボストン博物館ニ御関係之件 別紙辞令の通東洋部鑑査委員を囑托乍輕少一ケ年式百五拾弗(米金)御贈与之事と決定候ニ付寔ニ御迷惑と存候へ共御承諾被下度願候とあり、Arthur Fairbanks 館長名の一九一二年十一月十五日付英文辞令が別紙同封されている。

前述の通り、「与古為徒」扁額が書かれたのは、壬子(一九一二)秋杪(旧曆九月)、この年の旧曆九月は、新曆では一九一二年十月十日から十一月八日。天心は、「兼而得貴意候」と言っているので、雨山の東洋部(中国日本美術部)鑑査委員就任内諾は辞令が出た十一月十五日より前に得られていたことになる。筆者は、雨山は、内諾した後、鑑査委員就任記念品として、ボストン美術館に呉昌碩扁額を贈ることにし、呉昌碩に依頼、呉昌碩は、沈石友の助力を得て、十月十日から十一月八日の間に「与古為徒」扁額を揮毫し、それを雨山が職人に黒漆木額に仕立てさせたと考える。前出の一九一三年三月十八日付書簡に、「先便申上候通額面ハ当館宛運賃先払にて御送附被下度」とあることから、この頃には、ボストンに送る見通しが立っていたと考えても、時期的に符合する。

4. 長尾雨山の貢献

長尾雨山は、東京高等師範学校教授、東京帝国大学文科大学講師であった一九〇二年十二月、いわゆる教科書疑獄事件に巻き込まれ^[6]、一九〇三年十二月、上海に渡り、商務印書館で編訳に携わりつつ、詩壇耆宿の劉炳照(一八四七—一九一七)らと交わり、上海で詩会を創始している^[7]。そし

て、劉炳照を通して知り合った呉昌碩と深く交わり、中国の文人的教養を高いレベルで身に付けた⁸¹。この雨山がボストン美術館に関わり、天心が部長を務める中国日本美術部のために大きな貢献を成したことは想像に難くない。

これは雨山の鑑査委員就任前のことであるが、天心は、一九一二年五月十六日付書簡で、

陳レハ又々御面倒の至ニ候へ共自然御閑暇モ被為在候ハ、別封ボストン古銅器の銘二十四枚御読被下度 字体の年代并ニ難解の処ニハ解釈御示し被下度

と記し、雨山に古銅器銘文の読解を求めている。当時、天心は、ボストン美術館のために、鑄金家・岡崎雪聲（一八五四—一九二一）の古銅器コレクションを一九〇八年と一九一〇年に購入しており⁸²、その銘文解読が必要であったようだ。

筆者は、二〇一五年四月から二〇一六年三月まで、ボストン大学客員研究員としてボストンに滞在した際、ボストン美術館で研究調査をさせていただき、この天心が雨山に送った銘文拓片の残余が入ったファイルを見つけ出してもらって、拝見することができた。このファイルには、五種十五枚の拓片が入っており、天心が毛筆で「銘文二十四枚、五月十六日、雨山に問合せ」と記している。

天心は、漢学にも造詣が深かったが、古銅器の銘文は読めなかったようだ。それも当然で、当時の日本において、専門の漢学者であっても、読解ができる人は多くなかったであろう。そのような中、雨山は、これが可能な貴重なる存在であった。

天心は、自らを補う学識を有する雨山を頼りにし、鑑査委員辞令を送った前出一九一二年十一月二十一日付書簡では、

例之夏珪の巻ハ如何相成り候や 又目下他に珍しきもの御座候や 御漏らし被下度例の玻璃琉璃ニ関スル著書御見当り相成候ハ、御送り被下度又古銅器(彝器)の配列法及用途ニ関し何ニても御教示被下度

と記し、宋の夏珪の画卷について尋ねている。当時の天心の立場から、これがボストン美術館による購入を前提にしていることは明らかで、雨山がボストン美術館中国美術収集事業にも参画していたことが窺える。ちなみに、天心がボストン美術館のために購入した夏珪の画は二件あり⁸³、一つは天心が一九一二年五月に中国で購入した「宋元名人画冊」の一頁、もう一つは一九一三年に購入した傅夏珪「帰漁山水」であるが、前者は巻では

なく冊で、この時にはすでに購入済のもの、後者は天心の助手である早崎梗吉（一八七四—一九五六）が代理購入したものであるため、この時の「例之夏珪の巻」は購入に至らなかったようだ。

また、この書簡で天心は雨山に、「他に珍しきもの御座候や」と、さらなる購入品の可能性を尋ね、「例の玻璃琉璃ニ関スル著書」「古銅器(彝器)の配列法及用途」について教示を求めており、一九一二年十一月三十日付書簡では、

左の事項御教示被下度

○松泉老人 墨縁彙観 ハ珍本ニ候や 一部手ニ入れ度存候 叢書中に有之候ハ、御写し被下度間敷や

○羅文彬 光緒中の人 伝記御示し被下度

○張紳 明末の人 傳記御示し被下度

と記して、中国美術史関係事項についても教示と助力を求めている。

これは、雨山が天心の友人であり、鑑査委員を委嘱したからだけではなく、こういったこと全てに応えられる日本人の学者は、雨山しかいなかったからであろうと思われる。そして、雨山がこれに応えられるのは、やはり呉昌碩をはじめとする中国文人との交誼により、金石学と詩書画印という当時最新の中国文人的教養を高いレベルで身に付けていたからなのである。

ところが、雨山という高度なブレーンを鑑査委員として正式に迎え入れた天心は、翌年の一九一三年九月二日、満五十歳で逝去する。卓越した能力を有する中国日本美術部長を亡くしたボストン美術館は、後事を天心が委嘱した鑑査委員四名に託することにした。もとよりその中には、雨山も入っている。その際、館長の Arthur Fairbanks が雨山に宛てた書簡の控えがボストン美術館に残されていた。ここに全文を紹介しよう。

November 10, 1913

My Dear Mr. Nagao:

In the death of Mr. Okakura-Kakuzo, we have met with a personal and official loss which we feel quite unable to repair. We greatly desire, however, to honor his distinguished memory by continuing, to the best of our poor ability, the work of collecting and expounding the fine arts of Asia in the way indicated and, so far, carried out under his inspired guidance.

With this end in view, we feel that the first and most important step is to secure to this Museum, if possible, the continued services of the eminent scholars

and critics on whose wisdom and loyalty Mr. Okakura so firmly relied, and I am, therefore, asking Mr. Nakagawa, Mr. Niuro and Mr. Hayazaki, as I now ask you, to join in constituting a Committee of Experts whose business it will be to look after our interests in China and Japan. It was Mr. Okakura's wish that Mr. Nakagawa should take the lead as adviser to the Museum in matters relating to Oriental art, and accordingly I have asked him to act as Chairman of the suggested organization.

Trusting that the Museum may be so fortunate as to have your valued assistance in the future as in the past, and with expressions of the highest esteem, I am

Faithfully yours,

Director.

〔1913年11月10日

長尾先生

岡倉覚三先生の逝去により、私たちは、何とも埋めようのない私的な、そして公的な喪失感に直面しています。私たちは、それでも、乏しい能力の最善を尽くして、彼の素晴らしい指導のもと、道が示され、ここまで成し遂げられた東洋美術の収集と解説の仕事を継承することにより、彼の偉大な名声を顕彰したいと強く願っております。

こういった意向のもと、私たちは、最初にして最も重要な一步が、この美術館を維持するため、できれば、学識があり誠実に岡倉先生を固く信頼するすぐれた学者と鑑定家による業務を続けることにあると思っており、私としては、それゆえに、中川（忠順）先生、新納（忠之助）先生、そして早崎（梗吉）先生への委嘱と同じく、今、貴殿に、私たちの中国と日本に関する分野を担当する専門家委員会組織にお加わりいただきたくお願い申し上げます。なお、岡倉先生は、中川先生が美術館の東洋美術関連事項をアドバイザーとしてリードすべきとお考えであったので、それに従い、私は彼に提案する組織の委員長をお願いしたいと思います。

美術館は、幸いにもあなたの貴重なるご助力がこれからもこれまで同様に得られるであろうことを、最大の尊敬の念と共に信じております。

敬具

館長]

これは控えであるから、署名はされていないが、「Director」とあることから、当時の館長である

Arthur Fairbanks が差出人であることは間違いない。この書簡より、ボストン美術館の天心に対する高い評価と尊敬が窺え、それがそのまま天心が委嘱した中川忠順（一八七三—一九二九）、新納忠之助（一八六八—一九五四）、早崎梗吉そして長尾雨山という鑑査委員^[1]にも向けられていることがわかる。

この四人は、鑑査委員として、ボストン美術館のために尽力した人々である。中川忠順は、美術史家として天心の後継者的役割を果たし、天心没後も、一九一五年二月から八月までボストン美術館に赴き、作品整理を行なっている^[2]。新納忠之助は、仏像保存修理の専門家として活躍した。早崎梗吉は、前述のように天心の助手として、中国で作品購入を行なった。そして、長尾雨山は、金石学と中国文人的教養で独自の貢献をし、天心没後も協力を要請されていたのである。

5. おわりに

ボストン美術館が東洋美術の殿堂とも称されるのは、岡倉天心の卓越した学識と能力によるところが大きかったと言ってもいいだろう。ただ、東洋美術の中核を占める中国美術、とりわけその背景にある金石学や当時最新の文人的教養を天心は全て持ち合わせていたわけではなく、それを補ったのが長尾雨山であった。

ただ、雨山も最初からそういった学識を持ち合わせていたわけではなく、長期にわたる上海滞在中に、清末民初の混乱を避け、上海に逃れて来ていた学者・文人と親しく交流したことにより得られたのであり、隣人関係にあった呉昌碩は、その最たる存在であった。

さすれば、ボストン美術館に掲げられている「与古為徒」扁額に関わった三人は、期せずして、米国の美術館で、日本の人士が、中国の文人の助力を得る形で、高度な文化交流を行なったことになる。筆者がこれを、近代のボストン美術館に見る日中米文化交流と称する所以である。

謝辞

本文中でも述べたが、筆者は、今回、ボストン美術館で研究調査を行うことができた。その際、中国美術部長の Nancy Berliner 氏が、アーカイブ担当の Angie Simonds 氏をご紹介くださり、Simonds 氏が当時 Berliner 氏の助手を務められていた劉子亮氏と共に資料庫の隅々までお探しく下さり、そ

れまでないとされていた長尾雨山関係資料を見つけ出してくださった。本稿でこれを紹介でき、雨山の貢献の一端を明らかにできたことは、望外の喜びである。ここに記してお礼申し上げる。

注

[1] 岡倉天心、幼名は角蔵、後に名を覚三とする。福井の人、横浜生まれ。福井藩士であった父が横浜で経営する貿易商の次男として生まれ、James Hamilton Ballagh の塾で英語を学ぶ。東京外国語学校を経て、東京大学文学部を卒業、東京大学時代の恩師・Ernest Francisco Fenollosa の助手として美術研究に携り、Fenollosa と共に日本美術を研究していた William Sturgis Bigelow と知り合う。文部省に勤務し、東京美術学校設立に参画、初代校長となるが、排斥されて辞任、弟子の横山大観らと日本美術院を設立。一九〇四年、Bigelow の紹介状を持ってボストン美術館を訪れ、顧問として採用された後、わずか十か月間で目録を作成し、日本や中国に直接出向いて作品購入を行うなど、卓越した能力を示し、一九一〇年、中国・日本美術部長に就任、ボストン美術館の発展に大きく貢献した。

[2] 岡倉天心のボストン美術館における活動については、ボストン美術館館長（当時）Jan Fontein（石橋智慧訳）の「ボストン美術館東洋部を築いた人達—コレクションの歴史に関する諸ノートより—」（『月刊文化財』二三四号、一九八三年）以来、多く取り上げられ、とりわけ同美術館日本美術部長の Anne Nishimura Morse による「正当性の提唱—岡倉覚三とボストン美術館日本コレクション」（『岡倉天心とボストン美術館』、名古屋ボストン美術館、一九九九年）は、ボストン美術館所蔵文献資料を駆使し、天心の日本美術収蔵における姿勢と成果を明らかにした。また、久世夏奈子「岡倉天心とボストン美術館」（『美術史』一五九号、二〇〇五年）は、主にボストン美術館の一次資料に基づき、天心の同美術館における活動を概観し、「岡倉のボストン時代を、*The Ideals of the East*（1903）など主要とみなされる英文著作以後に起こった、彼自身の新たな「中国美術」観形成の契機として評価したい」とした。そして、清水恵美子『岡倉天心の比較文化史的研究 ボストンでの活動と芸術思想』（思文閣出版、二〇一二年）は、天心の「ボストン・ネットワーク構築」に着目し、その上で天心の「ボストン美術館中国日本美術部経営」を論じた。

[3] 呉昌碩、初名は俊、名は俊卿、倉石また昌碩と字し、缶廬、苦鉄などと号した。浙江安吉の人。鄞呉村の遷浙呉氏という名家に生まれる。一八六〇年、十七歳の時、太平天国の乱が故郷に及び、一家は離散し、その間に弟、妹、祖母、婚約者、母を失う。その後、父の影響で幼い頃から慣れ親しんだ篆刻で身を立てるべく、杭州の詒経精舎に入り、小学（文字学）と辞章を学んだ。詒経精舎では、創設者の阮元が摹刻した天一閣蔵北宋石鼓文本に出会い、生涯これを学ぶことにより、阮元の学統に連なる古文学派経学の学者であることを標榜した。詩書画印四絶の文人職業書画家として声誉を博し、一九一一年、六十八歳の時、上海に進出、海上派の領袖として活躍し、中国最後の文人と称された。日本人士とも多く交流し、とりわけ隣人関係にあった長尾雨山との交誼は親密であった。

[4] 長尾雨山、通称は楨太郎、名は甲、字は子生、雨山、石隠、无悶と号し、その居を何遠楼、艸聖堂、漢博斎という。讃岐高松の人。東京大学古典講習科を卒業後、学習院教師、東京美術学校講師（岡倉天心の依頼による）、第五高等学校教授（この時、夏目漱石と同僚となり、漱石の漢詩を添削している）、東京高等師範学校教授などを歴任、いわゆる教科書疑獄事件にまきこまれ、無実の罪で東京高師を辞職、一九〇三年十二月、上海に渡り、商務印書館に勤務した。商務印書館では、主に教科書編纂にあたり、日本のノウハウを中国に伝え、『最新国文教科書』などを校訂した。また、劉炳照と共に上海で詩会を興し、隣人となった呉昌碩の紹介で、西泠印社同人にもなった。一九一四年十二月、上海在住足かけ十二年、実質十一年で帰国し、京都に寄寓、富岡鉄斎の子・富岡謙三と共に寿蘇会を主催するなどして、そこに集う書画文墨界、政財界、新聞出版界、中国人士を書画文墨趣味ネットワークで繋いだ。

[5] 松村茂樹「呉昌碩と長尾雨山の上海愛而近路の旧居について」（『大妻女子大学紀要一文系一』第四十九号、二〇一七年）を参照。呉昌碩は一九一一年から一九一三年まで上海愛而近（エルジン）路均益里第五弄十号門牌に、長尾雨山は一九〇三年から一九一三年まで愛而近路二号に住んでおり、一九一一年から一九一三年までは共に愛而近路に住む隣人関係にあった。この扁額が揮毫された一九一二年は、まさにこの隣人関係の時期に当たる。

[6] 樽本照雄「長尾雨山は冤罪である」（樽本照雄

『初期商務印書館研究』, 清末小説研究会, 二〇〇四年. 初出は『大阪経大論集』第四十七巻第二号通巻二三二号, 一九九六年) は, これが冤罪であったことを証明している.

[7] 松村茂樹「長尾雨山が上海で参加した詩会について」(『日本中国学会報』第六十六集, 二〇一四年) を参照.

[8] 松村茂樹「長尾雨山と呉昌碩」(『中国文化』第七十二号, 二〇一四年) を参照.

[9] 筆者がボストン美術館で拝見した記録による. ボストン美術館には, 明治四十三(一九一〇)年九月十八日付岡崎雪聲与岡倉天心書簡及び

「CATAROGUE of OLD CHINESE BRONZES.」の下に鉛筆書きで「Okazaki Collection」と記された岡崎雪聲コレクション古銅器図録(小冊子)が残

されている.

[10] 筆者がボストン美術館で拝見した記録による.

[11] 中川忠順, 新納忠之助, 早崎梗吉の三人は, 一九一一年四月二日付けで鑑査委員に就任していることが, 『岡倉天心全集』第七巻(平凡社, 一九八一年)所収の書簡によりわかる.

[12] 中川忠順「驚く可きボストン美術館」(『現代名士 絵画清談』第三巻第八号, 一九一五年八月十日)の前書きに, 「ボストン美術館に岡倉覚三氏の後任として二月六日に出かけた東洋美術部顧問中川忠順氏が五日午後六時半春陽丸で横浜に帰着上京した」とある.

本研究は, 大妻女子大学戦略的個人研究費(課題番号:S2836)の助成を受けたものである.

Abstract

Wu Changshuo's "Yu-Gu-Wei-Tu与古為徒" Chinese Plaque, on the wall in the area of Oriental arts collection in Museum of Fine Arts (MFA), Boston, have been thought Okakura Tenshin, who was the head of Chinese and Japanese arts collection of the museum, had asked Okakura Tenshin, who was the head of Chinese and Japanese arts collection of the museum, had asked Wu Changshuo to make it. However, in fact, Nagao Uzan (he was a Okakura's friend and Sinologist who lived in Shanghai,) asked Wu Changshuo as his neighbor to write, and put it in a Black Lacquer. Then, he sent it to Okakura in Boston. Since Nagao was asked to be an advisory staff at MFA by Okakura at that time, he sent the plaque as an inaugural gift, I think. Okakura's contributions at MFA have been highly regarded, but nobody have mentioned there was cooperation by a scholar named Nagao, who had a relationship with Wu Changshuo and inherited the orthodox of Sinology. The purpose of this report is analyzing his works and finding out the signification of the cultural exchange between Japan, China, and the US, which have achieved success in modern times.

(受付日: 2017年7月6日, 受理日: 2017年9月11日)



松村 茂樹 (まつむら しげき)

現職: 大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科教授

筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科中退 博士(文学, 筑波大学)

専門は中国文化論, アジア太平洋国際交流論. 2015年4月より2016年3月まで, ボストン大学客員研究員として, 米国ボストンに滞在. ボストン大学アジア研究センターで発表するなどして, 日中米文化交流研究を進めた.

主な著書: 書を考える-書の本質とは(単著, 二玄社) 呉昌碩研究(単著, 研文出版) 呉昌碩談論-文人と芸術家の間-(単編, 柳原出版) 書を探る-王羲之から書教育まで(単著, アートダイジェスト) 近代中国の文化人と書(単著, 研文出版) 鄭板橋(共著, 芸術新聞社) 傅山(共著, 芸術新聞社) 遺老が語る故宫博物院(共訳, 二玄社)